

【調査から得た視点のまとめ】

活動目標 1 「身近な福祉課題に気づく力を高める」	
1 身近な住民同士や世代を超えた交流の推進	■ 高齢者だけで「お互い様の活動」を行うのではなく、もっと若い世代、これからをつくっていく世代とのつながりを増やしていく必要があると思う。(地域団体) ■ 有料のコンサートやジムなど、サービスを買うことを好む人が増えている。その方が、満足度が高く、しがらみを避けることもできる。(高齢福祉) ■ 町内会が地域のつながりのベースとなる。町内会がしっかりしていることで、他の地域団体の活動も伸びてくる。(地域団体)
2 自然な気かけ合いができる環境や仕組みづくり	■ 何かのときに手伝うのは日々の関わりがあるからだと思う。(地域団体) ■ みんな実情を知らない。だから、やらなくてもいいと思っていたり、自分には関係ないと思っていたりする。そういった問題をちゃんと知ること、気づくことが大切だと思う。(学校) ■ つながりをつくるために、必ずしも特別な仕掛けが必要だとは思わない。お互いのことに踏み込み過ぎる必要もなく、ちょっとした近所付き合いや、あいさつなど、やんわりとしたつながりが広がっていけばよいと思う。(市民活動) ■ 様々な人の参加のもと、「みんな一緒」という雰囲気の中でイベントを行い、自然につながりが広がっていくような形を意識している。(地域団体) ■ 「何かあったときのための地域のつながり」と言っても、何も起きない期間が長くなることで、意識が軽薄化する。(高齢福祉) ■ 「高齢者」「障害者」「子ども」「地域の人」など、その人の背景情報をもとにつながるのではなく、当たり前に関わることができる環境をつくるのが大切。(学校) ■ 昔は障害者という状態を気にせず、地域の中で自然な形で関係性をもつことができていた。おせっかいな人がいて、障害者だからではなく、誰彼関係なく世話を焼いてくれる人もいた。今は配慮などを気にするあまり、かえって距離感ができてしまっているようにも思う。(障害福祉) ■ 医療も治療から予防に向かっているが、それは、日頃からしっかり行わないと広がっていかない。(保健医療) ■ セミナーや研修会などは、おそらく勉強になるのだろうが、さまざまなところで行われており、よほど興味がある講師などでないと足を運ばなくなっている。一方で、よく知っている講師だと大体の内容が予想できてしまい、それも参加しない。人の話を聞かないわけではないが、素晴らしい実践が増えたことで、自分が話したい人が増えた。(市民活動)
3 身近な相談機能の強化	■ 近年は1人暮らしの人が増えているだけではなく、家族と同居していても家庭内で会話がないうという人が多く、「形では見えない孤独」があると思う。だからこそしっかり話せる場が必要。(地域団体) ■ 患者さんの中には、「自宅での生活大丈夫だろうか」と心配になる方もいる。ただ、推測の部分もあるし、具体的な解決策を知っているわけではないため、直接本人に聞くわけにもいかない。(保健医療) ■ 福祉の相談窓口について、どこに相談すればよいのかわかりにくい。(保健医療)

【調査から得た視点のまとめ】

活動目標 2 「地域の課題や良さを共有する場づくりを進める」	
1 課題やニーズ、地域の強みを共有する場づくりの推進	■ 問題を当事者だけのせいにしては、必ずまた起こる。再発防止には、仕組み、組織、社会の中で、何が悪かったのかを考えていく必要がある。(高齢福祉) ■ それぞれの世代ごとに困っていることについて継続的に話せる場があると良いと思う。子どもが大きくなると、それまであった親世代のつながりの機会がなくなってしまう。(障害福祉)
2 課題解決を図るネットワーク構築の推進	■ 周囲を巻き込んでいくというよりも、1人や1つの団体ではできないことがあった。さまざまな団体や立場の人がそれぞれに行っていることがあるが、それは全て地域の中にある。地域のことを最もよく知っているのは、そこに住む地域の人。地域の人なしではできないと思った。伝え合って、認め合って、支え合うことが大切。(市民活動) ■ 地域の中にもっとネットワークが必要だと思う。地区の範囲でつながる必要があることはもちろん、小さな範囲でのつながりをもっと増やしていく必要がある。それが災害時等、いざというときに活かされる。(市民活動) ■ 仙台市域、区域で動的なネットワークをつくることは難しいと感じている。小さいエリアで、福祉分野だけではない、多様な社会資源と連携したいと考えている。(高齢福祉) ■ NPO 活動など、対価が認められる活動が出てきたことで、社会貢献の考え方・捉え方も多様になってきた。単一の団体で責任を持って、さまざまな活動ができるようになったので、ネットワークを重視しない団体も出てきたように思う。ネットはあってもワークしているのだろうか。(市民活動) ■ うまく調整することで、団体が違っても、その場所に行けば、何か開催されているという仕組みができればいいと思う。(学校)
3 身近な課題やニーズ、地域の良さを知る・学ぶ機会をつくる	■ 「困っている人がいること」を知ることが、支援の必要性に気づききっかけになる。(学校) ■ 地域内で福祉について学ぼうとすると、高齢福祉の内容になる。障害理解等の研修もぜひ行ってほしい。(障害福祉) ■ ICT の活用などとも言われているが、次につながる関係性をつくるためには、やはり顔を合わせた情報交換が大切。(高齢福祉) ■ 「ちょっと普通とは違うな」と思う人を見かけても、あからさまに差別をする人、差別しようと思っている人はいない。多くの人は「どう接していいかわからない」という状態で、うまく距離感が分からず、接することができない。それに対して本人は「避けられている」と感じてしまう。そういった認識の「ずれ」が、うまくいなくなる原因だと思う。(障害福祉)

【調査から得た視点のまとめ】

活動目標3「解決のために行動する」	
1 住民同士が支え合い、助け合う活動の推進	■ 楽しいことは多くの人で楽しみたい。1人分出来なくても、それぞれができることを足し合わせて、1にしていく。(障害福祉) ■ 「課題だよね」と捉えても、「何かしよう」というところまではいかないと感じている。仕組みがあるだけではなく、しっかり機能する必要がある。(高齢福祉) ■ 地域における公益的な取組を通して、地域への意識というものがすごく高まった。意識をしなければ次の行動には移らない。(障害福祉) ■ 長期的な目的を持っていたわけではなく、目の前の活動に一生懸命取り組んだことで、活動が伸びていった。そういった視点も大切だと思う。(地域団体) ■ 活動する層、運営する層、外部への働きかけを行う層など、団体内の役割をうまく多層化して、分担することで、うまく活動が広げられた。(地域団体)
2 コミュニティソーシャルワーカー(CSW)を配置する仙台市社会福祉協議会や地域包括支援センター等の支援機関との連携協力	■ 社会福祉協議会には、「社協とどこか」の連携に留まらず、各支援機関同士をつなぐハブとしての活躍を期待している。(障害福祉) ■ 在宅医療が進んでくれば、ますます地域包括支援センターと医療分野の連携も重要になっていくと思う。(保健医療) ■ 包括やケアマネージャーが、患者と病院の調整役として動いてくれることはよくある。また、担当者によっては、病院側に患者のプランの情報提供をしてくれることもある。(保健医療)
3 行政や福祉活動団体、福祉施設など多様な主体との協働の推進	■ 他機関との連携がスムーズにいかないこともある。その際は、個人で相手機関にアクセスし話し合うよりも、組織で意見をまとめ、組織同士で話し合いをした方が良い場合がある。(地域団体) ■ 普段の診察の中で、気になる世帯に遭遇することもあるが、個人情報の観点もあり、関係部署へつなぐことに躊躇してしまう。加えて、福祉につなぐといっても、つなぎ先が分からないこともある。「うちに何をしてほしいのか」と言われても困る。(保健医療) ■ 同じ業界であっても、日頃のつながりがなければ連携することは難しい。(障害福祉) ■ 他の支援機関につなぐ際には、もっと丁寧に行う必要があると思う。事前情報があることと、0から関わることは、その後の支援に大きく影響することもある。(保健医療) ■ 最初からいろんなところと連携できたわけではなく、活動を行う中で自然につながりが広がっていった。(地域団体) ■ 社会課題を共有できるという点などからは、集合体の意義はあると思うが、1つのことを長くじっくり行なっていくのは、個別の組織の方が向いていると思う。(企業)

【調査から得た視点のまとめ】

4 地域福祉活動の資源の活用と充実	■ 参加しやすい環境づくりには、寄りやすい場所があることも非常に大切。そういった場所を持っているところと連携できると大きい。企業なのであれば社会貢献活動として PR できる。(地域団体) ■ 支援制度は生活の延長線上にあるという視点が大切。例えば就労支援と言っても、働く以前に社会とのつながりがなかったり、適切な生活習慣がなかったりする。支援だけを切り離してしまうと、解決にはつながらない。(障害福祉) ■ 活動を支援する助成金などはあるが、その報告書を作成するのが大変だという声もある。地域福祉活動の担い手のほとんどは、主婦等、ごく普通の人。本来社会制度で補うべき部分を、善意で活動してくれている人たちである。それに対して、あまりにも仕組みが追い付いていないと感じる。柔軟性も足りない。資源がもう少し気軽に使えるようになったら良い。(学校)
5 ニーズに応じた新たな活動の実施やサービスの提供	■ 変わらないために、変わっていく必要がある。社会福祉法人や社会福祉施設が、社会課題に立ち向かう組織として、これからも1番手となっていくためには、その時代のニーズに合わせて変化していく必要がある。(高齢福祉) ■ 地域にある団体や関係機関は、それぞれにやりたいことや目的にしていることがあるので、さまざまなところとつながると、それがきっかけとなって、自然に新たな活動が生まれていく。(地域団体) ■ 長期的な目的を持っていたわけではなく、目の前の活動に一生懸命取り組んだことで、その時その時必要な活動が生まれてきた。そういった視点も大切だと思う。(地域団体)
6 新型コロナウイルス等の感染症予防に留意したつながりを切らない地域活動の工夫	■ コロナ禍中は、以前まで行っていた活動は難しくなった。しかし、皆さんの生活はそこにある。助けを必要とする人がいる中で、何もしないという選択肢はなかった。(市民活動) ■ コロナ禍で ICT 活用などにも取り組んだが、あまり広がりを持てなかった。現場とリモートが混在することで、参加者との関係づくり、あるいは参加者間関係づくりがうまくできなくなる。(高齢福祉)

【調査から得た視点のまとめ】

活動目標 4 「一人ひとりの住民の参加を推進する」	
1 住民の主体的参画、ボランティア活動の推進	■ できることが張り合いになって、生活を豊かにすると思う。「どんなことがその人にとって大事なのか」という点が大切だと思う。(保健医療) ■ 近年は、「有償ボランティア」を始め、対価を求める考え方が広がっている。若い人は活動に負担感を感じるというよりは、無報酬の活動という点に違和感がある。(地域団体) ■ ボランティア活動は昔の方が盛り上がっていた。「何かしたくて」という気持ちでボランティアに取り組む人がたくさんいた。現在は社会貢献の選択肢が多く、ボランティアだけが答えではなくなっている。それはもちろん、いいことでもある。(市民活動) ■ 社会参加というものがあまり重視されない時代に、抑圧されて過ごしてきた人は、自己実現欲求があまり強くない。本人が「何かをしたい」とならないことには、何もできない。強いことはできないし、強いたところで次につながらない。(障害福祉) ■ 否定されたり、受け入れられなかったりした経験があると、社会参加が怖くなっている。その場所で、誰かから必要とされることや、できることがあるという自信があれば、参加したいと思えると思う。(障害福祉)
2 地域で活動するボランティア、リーダー、コーディネーターの発掘と育成	■ みんな「認められたい」「愛してもらいたい」という気持ちがあると感じる。その人が誰かのためになっていると実感できること、役割を見つけてあげることが大切だと思う。(保健医療) ■ 思いやる気持ちや行動について、子どもたちが学ぶ機会や社会をつくることが大切。そのためには、大人が率先して見本となっていく必要がある。学んだ子どもたち全員が将来行動に移すということはないと思うが、その一部が取り組むようになり、リーダーシップをとってもらえたらよい。(企業)
3 活動に参加しやすい仕組みづくりの推進	■ 地域での小さな活動が目に見えるようにしていかなければならないと思う。(保健医療) ■ 活動に参加することは、何もつながりがいい中では難しい。いろんな人と顔が繋がれば、もっと住民参加が促進されると思う。(保健医療) ■ 集いの場の雰囲気は参加者がつくっていると思う。参加者がのびのびと過ごせる場をつくることで、「楽しそうだから協力したい」と思う人を増える。(地域団体) ■ 何かをきっかけに引きこもってしまう人はいるが、必ずしも無理をして外に出る必要はないと感じている。何かをしたいと思ったときに、機会や選択肢があることが大切だと思う。(保健医療) ■ 住民による活動は、範囲が明確になっていないこともあり、取り組みの幅がある。「そこまで、やるのか(定期的に近所の方に料理を作り、届けたり)」という活動もあるし、一方であまり活動をしていない方もいる。(地域団体)

【調査から得た視点のまとめ】

4 多様な活動主体・地域資源とつながる	■ 地域資源がもっと気軽に使えることができるようになれば良い。(学校) ■ 人口減などの影響で、障害者も減ってきている。そうすると、当事者団体は会員が減り、活動継続が苦しくなる。昔であれば、障害者が結託して、要望行動を行うのが当事者団体の意義だったが、今は境遇の近い者同士が集まる場、仲間づくりの場になっている。地域で十分につながりがある方は、団体に入る必要がない。地域の障害理解が進んで、障害者が地域に馴染んできている。それは良いことなのではないかと思う。(障害福祉) ■ 経営者としては、地域に向けて何かを行うのは、お世話になってきた「おかえし」をするという感覚で、まわりまわってまた自分に返ってくるものと思っている。しかし、企業として行う場合に、何らかのメリットがなければ、社員の理解は得られない。取組が本業につながることで、社員の反応も変わってくる。(企業)
5 地域福祉活動の広報強化	■ 高齢福祉、障害福祉と言われればイメージできるが、「地域福祉」や「地域福祉活動」が具体的にどのようなものを指すのか、また、どのような取り組みが行われているのか、よくわかっていない。そういう人も多いと思う。(保健医療) ■ 必要なのに望まない人、必要なのに来られない人、そういった人に治療や支援を届けたい。そうした人に情報を届ける、PR するには、どのようにすればよいだろうか。(保健医療) ■ もっと社会貢献した側が、「こんなことをやった」と PR すべきだと思う。発信することによって、「そんないいことやっているんだ」という目で見てもらえ、支援先の周知にもつながる。(企業) ■ 近年はネットでさまざまな情報が手に入るため、ちょっとしたネガティブな情報を鵜呑みにして、自己判断で必要な治療を中止する人もいる。情報が溢れて、整理ができていないと感じる。(保健医療) ■ PR は誰をターゲットにするのか、ターゲットにあった情報発信が必要。情報が届いていない層があるのであれば、そこをねらっていくと良いと思う。(障害福祉)

【調査から得た視点のまとめ】

地域福祉活動計画に関するご意見等
■ なんでも言っていて、何も言っていないように感じる。もう少し具体的な話の方が良いと思う点もある。(高齢福祉) ■ できている、できていないがわかるように、弱みが見えるような形に評価軸を設定した方が良いかと思う。(高齢福祉) ■ 次期計画策定のタイミングにおいて、前期になかった内容を取り込もうとなった際には、何か理由があると思う。全体的にそうなれば実のある計画になるのではないかと思う(既存の項目を引き継ぐ場合も同様)。(高齢福祉) ■ 具体性が見えないという問題はあると思う。目標にしても主語が分かりにくく、「誰が」「誰に対して」というところがはっきりしない。結果全て他人事のように見えてしまっている。 ■ 理想と現実は異なるので、プランをどう行動に移していくかという点が大切だと思う。(障害福祉) ■ もっと若い世代(大学生や高校生など)の意見を取り入れた方が良いと思う。(地域団体) ■ 福祉に関する言葉が増えてきたように感じる。共生や多様性など。理解が追い付かない人もいる。(地域団体) ■ 内容としてはその通りなのだと思うが、本冊子の方は一般の人はあまり詳しく見ない。概要版の方を、柔らかい雰囲気、1番伝えたい部分を中心に伝えられると良いと思う。 ■ 住民主体の住民参加でつくるという視点が大切。色々な種別の委員が入っていることが住民参加ではない。色々な人たちに聞き取りをすることが住民参加でもない。